双子の悪戯

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
双子の悪戯

【Ｎコード】
Ｎ０８９８ＢＡ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
亜実と真実はそっくりの双子だが兄の丈だけはどちらがどちらなのかわかる。二人はその兄の鼻をあかそうと悪戯を仕掛けるが。アイドルマスターのあの二人をモデルにして書いた作品です。

第一章

双子の悪戯

安曇亜実と真実は双子である。
二人共髪の色は茶色で目が大きくぱっちりとしている。唇は小さい。
小柄で色は白く亜実が右で、真実が左で髪をちょんまげにしている。その二人を見て。
二人の両親もだ。どちらがどちらかというと。
「ええと、右が亜実？」
「左が真実だったか？」
こんなことをだ。首を捻って言うのだった。
「どっちがどっちか」
「わからないよな」
「ええ、少し」
こんなことを言う始末だ。しかしだ。
二人の兄であるだ。丈だけは違っていた。
飄々とした外見で黒髪を少し伸ばしている。背は高くすらりとしている。顔は少し長くいつも優しい笑顔である。その彼だけがなのだ。
二人がどちらかをだ。見分けられるのだった。
朝だ。亜実がたまたまだ。
髷を左にしていてもだ。すぐにこう言ったのだった。
「あれ、亜実今日はちょんまげ逆なんだな」
「えっ、わかったの」
「わかるさ。そんなの」
「そんなのって」
そう言われてだ。亜実はだ。
兄にだ。目をしばたかせて言葉を返した。

「お兄ちゃんだけしかわからないよね」
「俺だけみたいだな、本当に」
「っていうか何でわかるの？」
彼女からだ。こう問い返した。
「今日ちょっとね」
「ちょんまげ変えたのか」
「そう。それで真実は」
「おはよう」
その真実も来た。見ればだ。
彼女のちょんまげは左だ。しかしなのだ。
それでも丈はだ。彼女にもこう言ったのだった。
「一人がわかったらもう一人もわかるよな」
「それでわかるのが凄いのよ」
真実もだ。目をしばたかせて兄に返す。
「何でわかるのやら」
「不思議よね」
「全くね」
双子で言い合う。服の色は違うがそれでもだ。
まるで鏡合わせの如くだ。二人はそっくりだ。その場にいた両親もだ。
目を顰めさせてだ。こう言うのだった。
「お母さんわからないけれど」
「お父さんもだよ」
朝食のテーブルでだ。こう話すのだった。
「どっちが亜実でどっちが真実か」
「ちょんまげまで変えられるとな」
「それでどうして丈はわかるのかしら」
「親ですらわからないのに」
「まあね。ずっと見ているからね」
それでわかるとだ。丈はにこりと笑って両親に話す。今は一家全

員で一つのテーブルに座ってだ。それで朝食を食べながら話をしているのだ。メニューは納豆に白い御飯に豆腐の味噌汁、梅干に卵焼きだ。

その中でだ。丈は納豆を箸でかき混ぜながらだ。話をするのだ。

「二人のことはわかるよ」

「そうそう、お兄ちゃんはね」

「昔からなのよ」

二人もここで言う。

「私達がどっちかわかるから」

「どんなにそっくりにしてもよ」

「何でかな、それって」

「私達もわからないけれど」

「だから。コツなんだよ」

彼はこう言うのだった。

「普通にさ。わかるんだよ」

「だから何でわかるのよ」

「お父さんもお母さんもわからないのに」

「お兄ちゃんだけ、わかるのは」

「コツっていっても」

二人ですらわからないことだった。しかし丈だけはわかることだった。

第二章

それでだ。ある日のことだ。
亜実と真実はだ。ふとだ。こんなことを思いついたのだった。
「ねえ、お兄ちゃんでもね」
「わからないようにするのね」
「そうよ。お互いそっくりにして」
「それでわからないようにするのね」
二人でだ。笑顔で話していた。高校の帰りにファミレスに寄ってだ。向かい合って話をしている。
オレンジのビニールのだ。ファミレス独特の壁とそのままになっている席に座って話をしている二人を見てだ。店員さん達もだ。
首を捻ってだ。そうして話すのだった。
「ええと、あの娘達って」
「どっちかな」
「どっちがどっちなのか」
「わからないわよね」
「あの二人って双子かしら」
「そうじゃないの？」
こうだ。首を捻って話すのだった。
「一体どっちがどっちなのか」
「わからないけれど」
「あんなにそっくりな双子ってね」
「ちょっとないわよね」
「まるで鏡映しね」
彼女達もこう言う始末だった。とにかくそっくりの二人だった。
その二人がだ。さらに話していた。
二人はアイスティーを飲みながら話しているの。その飲むタイミングも飲み方も全く同じだ。本当に見分けがつかない。丈以外には。

その二人がだ。話していることは。
「それでよ」
「うん、それでよね」
真実が亜実の言葉に応える。
「具体的にどうするの？」
「まず。格好はね」
「格好は？」
「お兄ちゃんが今まで見たことないみたいな格好にするのよ」
亜実は笑顔でこう提案する。
「人間初見は中々わからないじゃない」
「それは確かにね」
「そう。それでね」
さらにだというのだ。
「二人共ね」
「同じ格好よね」
「そう、何から何までね」
同じ格好にするというのだ。
「完全によ」
「衣装もアクセサリーも」
「メイクも派手にして」
そこもだ。そうするというのだ。
「もうお兄ちゃんがわからないようにするのよ」
「それで今度こそお兄ちゃんがわからないようにするのね」
「一回だけでもそうしたいじゃない」
亜実は彼女なりの意地を見せた。１１６
「そう思うでしょ、真実も」
「ええ、それはね」
真実もだ。その通りだとだ。亜実の言葉に頷く。
「子供の頃からいつもだからね」
「どんなにしても見分けられるじゃない」

「だからなのね」
「そう、だからよ」
亜実はここで真実にさらに言った。
「もうね。思いきりね」
「思いきり。派手な格好になるの」
「派手も派手によ」
亜実のその言葉は自然に上ずってきていた。
「これでもかっていう位にね」
「派手な服を着てメイクをして？」
「それでわからないようにするのよ」
これが亜実の提案だった。
「二人で同じ格好をしてね」
「それでお兄ちゃんを化かすのね」
「そうするのよ。どうかしら」
ここまで話してだった。亜実はだ。
真実にだ。再び問うた。

第三章

「今度こそお兄ちゃんの鼻をあかすのよ」
「そしてその為には」
「私達二人が力を合わせて」
「そうしてこそよ」
まずはそこからだった。二人の団結が不可欠だった。
それは真実もわかっていてだ。それでだった。
彼女もだ。強い声で頷いたのだった。
「わかってるわ」
「乗ってくれるわね」
「乗らない筈がないでしょ」
真実はにやりと笑って双子の言葉に応える。しかしそのにやりとした笑みはどうにも彼女には似合っていない。ただ本人は気付いてはいない。
その彼女がだ。さらに言うのだった。
「だって。ずっとだからね」
「そうよね。本当にずっとだから」
「たまにはお兄ちゃんを化かさないとね」
「狐になるのよ」
化かすからだ。狐だった。
「いいわね。狐になってね」
「そうしてお兄ちゃんを」
「一回でもいいから騙してみせましょう」
二人はがっしりと手を握り合った。まさに誓いであった。
その誓いを交えさせてだ。二人はだ。
早速動きはじめた。ブティックに入りそうしてだった。
派手な服、色もデザインも一組選びだ。そしてだ。
メイクもだ。二人でだった。

「こんな感じ？」
「そうよね。もっと似せてね」
「そうしようね。じゃあ」
「こんな感じよね」
二人で話しながらだった。
メイクも究める。そしてだった。
二人で万全だと確め合ってだ。そうしてだった。
ある日丈だけが家にいる時、彼が大学の講義もなくアルバイトもない時で一人家にいる時を見計らってだ。化けてから家に戻りだ。
そのうえでだ。まずは亜実がチャイムを鳴らした。
そうしてだ。彼女が出て来た丈に話した。
「あの」
「んっ、君誰かな」
丈が見たのはオレンジと赤、それに黄色のあちこちがぎざぎざになった感じになっている派手な上着に右と左で大きさが違う紫のスカートを穿いてしかも黒いハイソックスに青や赤の光るイヤリングにブレスレット、派手なメイクをした女の子だった。
髪は茶色でそれをロングにしている。その彼女が来てだ。
そのうえでだ。丈にこう言ってきたのだ。
「亜実ちゃんと真実ちゃんのお友達です」
「ふうん、二人の？」
「はい、小清水麻美といいます」
そうだというのだ。
「宜しく御願いしますね」
「ふうん。二人のね」
丈は表情ははっきりしない感じだった。しかしだ。
その目は一瞬だが光った。それでだ。
こうだ。その彼女に言ったのだった。
「それで何の用かな」
「あのですね」

「あの？」
「亜実ちゃんと真実ちゃんが呼んでますよ」
そうだというのだ。
「ちょっと来てくれますか？」
「あれっ、何かおかしいな」
すぐにだ。丈はだ。
気付いた感じでだ。こう彼女に言ったのだった。
「二人の家はここなのに」
「はい、そうですよね」
「それで何でここに戻って来て俺に直接言わないのかな」
「それはその」
そこまで考えていなかった。それで亜実は。
内心焦りながらだ。こう兄に返した。

第四章

「お家じゃ話せないことらしいです」
「家じゃね」
「そうみたいなんですよ」
こうだ。必死に取り繕って話したのだった。
「ですからちょっと来てくれますか？」
「どういう事情かはわからないけれど」
また一瞬だけ目を光らせてからだ。
それからだ。彼は麻美、実は亜実に話した。
「それじゃあね」
「一緒に来てくれますか？」
「そうさせてもらうよ」
こう答える彼だった。
「じゃあ案内してくれるかな」
「是非共」
「それでその場所は何処かな」
丈は場所についてもだ。彼女に尋ねた。
「そこは」
「公園です」
今度は考えていたので。亜実も答えられた。
「ここから少し行った」
「ああ、あそこだね」
そこまで聞いただけでだ。丈は理解した。
それでだ。こう彼女に返したのだった。
「あの公園だね」
「あそこで話したいそうで」
「じゃあ行こうか」
ここまで聞いてだ。丈は微笑んでだった。

その場所に入りだ。そうしてだった。
派手な外見の女の子に案内されてだ。戸締りをしてから家を後にした。二人でだ。
公園までの道を歩いていた。彼女は右にいた。筈だった。
丈が右を向くとだ。彼女はいなかった。しかしだ。
左からだ。声が聞こえてきたのだった。
「あの」
「んっ？」
「どうしたんですか？」
「いや、さっきだけれど」
こうだ。左を向いて声に応えた。するとだ。
そこに彼女がいた。そしてにこにことしている。さっきまで右にいたのにだ。
その彼女を見てだ。丈は言うのだった。
「右にいたんじゃなかったの？」
「私さっきからこっちにいましたよ」
「あれっ、そうだったかな」
「そうですよ」
実は物陰に隠れていてだ。二人についてだ。入れ替わったのだ。
そうしてだ。兄に仕掛けたのだ。
その真実がだ。笑顔で兄に話す。
「気のせいじゃないんですか？」
「だったらいいけれど」
丈は首を捻りながら応える。
「それでだけれど」
「公園にですね」
「一体何なのかな」
このことがだ。丈は気になるといった様子だった。少なくとも真実からはそう見える。
「本当に」

「まあ公園に行かれれば」
「わかるんだね」
「そう思います」
「そうなんだ」
ここでだ。丈は顔を正面にやった。その間に。
入れ替わりだ。今度は亜実がだった。
右からだ。声をかけたのだった。
「それでなんですけれど」
「あれっ！？」
右に同じ顔がいた。それで左を振り向くと。
いないのだ。右に戻っていた。それを見てだ。彼は。
「右って」
「最初からこっちでしたよ」
「いや、さっき左にいなかった？」
「気のせいじゃないんですか？」
くすりと笑ってだ。亜実はその素顔を隠して言う。

第五章

「私ずっとこっちですよ」
「そうだったかな」
「はい、そうですよ」
「まあそうだね」
丈は彼女の話を聞いてとりあえずといった感じでだ。
また納得した顔になりだ。頷いてだ。
それでだ。今度は左右を見ることなくだ。公園に案内された。
そして公園に着く。ジャングルジムに滑り台、ブランコに砂場があるごく普通の公園だ。だが今は遊ぶ子供達もその子供達を見守る親達もいない。
そんな寂しい中でだ。丈は。
今度は左を見た。そこに彼女がいた。
その彼女にだ。こう言ったのだった。
「それで亜実と真実だけれど」
「はい、今来ると思います」
「いや、来るんじゃなくて」
ここでだ。彼は。
楽しげな笑みを浮かべてだ。こう告げたのだった。
「もう来てるんじゃないかな」
「あれっ、そうですか？」
「そう。それも二人共ね」
そうではないかとだ。彼女に言うのである。
「来ているんじゃないかな」
「あれっ、そうですか？」
真実は兄の言葉を受けて公園を見回す。亜実が隠れている木陰以外には人はいない。亜実が木陰に隠れていることも知っているのは真実だけだ。

その筈だった。しかしだ。
ここでだ。丈は言った。
「ねえ真実」
「えっ！？」
「亜実もさ」
今度はその木陰を見ての言葉だった。
「何の用かな」
「えっ、私は」
「だから。今俺の目の前にいるのが真実で」
こうだ。その派手な女の子を見てにこりとして言ってだ。
「木陰に隠れてるのが亜実だよね」
「えっ、私達は別に」
「ほら、私達って言ったね」
その言葉は失策だった。そしてその失策をだ。
丈は見逃さなかった。それでだ。
さながら野村克也が相手チームのエラーを見逃さないのと同じでだ。彼は一気に攻めた。そして亜実と真実はというと。
亜実は木陰で慌ててしまいだ。つい姿を出してしまった。真実もだ。

第六章

困った顔になりだ。あたふたとする。その二人を見てだ。
丈はだ。さらに言うのだった。
「で、何の悪戯かな」
「悪戯って」
「それはその」
亜実も観念して出て来てだ。兄に言う。
「お兄ちゃん今回はわからないって思ったのに」
「どっちがどっちかどころかよ」
「私達だってわからないと思ったのに」
「それでどうして」
「だから。俺は二人のお兄さんなんだよ」
ここに理由があるというのだ。
「わかるよ。普通に」
「だから何でわかるのよ」
「こんなにメイクしたのに」
「誰もわからない筈なのに」
「それでどうして」
「愛情だね」
にこりと笑ってだ。丈は二人に話した。
「妹への愛情。それに尽きるね」
「けれどお父さんもお母さんもよ」
「全然わからないのに」
「どうしてお兄ちゃんだけ？」
「わかるのよ：」
愛情ならやはり両親である。それでだ。
二人も言う。しかしだ。
その二人にだ。丈はまた言うのだった。

「まあ。愛情の質が違うっていうか」
「愛情の質？」
「っていうと？」
「親は子供を子供として見るけれど」
自分達の子供、それだというのだ。
「けれど兄貴は違うんだよ」
「お兄ちゃんはなの」
「違うの？どういう風に？」
「妹を。血はつながっててても男の子と女の子じゃない」
そこに理由があるというのだ。
「だからさ。細かいところとか見るから」
「それでわかるようになったのね」
「私達の違いに」
「そういうことだよ。つまりは」
「ううん、兄妹でもなのね」
「男の子と女の子だと」
「わかるんだよ」
丈はまた二人に話す。
「その辺りはね」
「ううん、男の子と女の子って」
「そういうのがわかるのね」
二人もだ。兄の話を聞いてだ。１１２
何となく頷いてだ。それでだった。
兄にだ。こう尋ねるのだった。
「じゃあ私達も？」
「お兄ちゃんが若し双子だったら」
「わかるようになるの？」
「そうなの？」
「いつもよく見るようになるからね」
異性としてだ。そうなるからだというのだ。

「とはいっても変な風には見ていないから」
「それは当たり前でしょ」
「そんな風に見たら変態じゃない」
この辺りは兄妹だからだ。やはり血縁は大きい。
「まあとにかく。兄妹って」
「そういうものなのね」
「だからわかるんだよ。亜実と真実がどっちか」
笑いながらだ。丈は二人に話す。
「そういうことがな」
「ううん、それでわかってたの」
「私達の違いが」
「今やっとわかったわ」
「ずっと不思議だったけれどね」
二人は話を聞いて納得した。そうしてだった。
お互いにだ。顔を見合わせてから。あらためて兄に顔を戻して言う。
「けれど。何時かは絶対にね」
「お兄さんの鼻をあかしてあげるからね」
「待ってるさ、その時を」
丈は飄々とした感じの笑みで二人に返した。それから三人で家に帰りだ。一家団欒の時間を過ごしたのだった。そうしたのである。

双子の悪戯　　完

２０１１・８・２４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0898ba/

双子の悪戯

2012年1月2日00時45分発行